

一九五八・十一（野帳第七冊抜刷）

藥王山法海寺

（調査の資料）

愛知県知多郡八幡公民館

薬王山法海寺

(調査の資料)

知多町八幡公民館郷土史編集部

薬王山法海寺は愛知県知多郡知多町八幡にある天臺宗の古刹である。

「法海寺儀軌」と称して寺に保存する由緒によれば、寺の開創は天智天皇の時代といっており、その経緯を次のように述べている。すなわち開基は新羅国明信王の太子道行法師といつて、日本書紀卷二十七の天智天皇の章に「沙門道行、草薙劔を盗みて新羅に逃げ向く、而して中路に風雨にあいて荒迷いて帰る」とあるが、のち道行法師が帰国を断念して当地に堂宇をいとなんでいたところ、天智天皇不子のおり当山に祈念された結果ただちに快癒され、「薬王山法海寺」との勅額とともに、寺田二百八十町をたまわつたといっている。

しかし寺の創建を遺跡や遺物の実証資料にもとめて、伝承を再検討した場合、飛鳥・白鳳の時代における寺の建立を実証するにたる資料は何一つ認めることができなかった。現段階においてうかがうことができる最古の資料は、寺域より採集された一群の古瓦と、一隅に保存されている塔心礎石の二つであり、ともに平安時代初期にとどまるものである。

そして平安時代の創建後も度かさなる火災をうけて、現在にいたる寺の歴史を明らかにできる資料はきわめてわずかである

が、鎌倉時代の末期に火災をうけてのち再興された室町時代の法海寺がこれに次ぎ、この法海寺は桶狭間戦の前年その前哨戦として織田勢に焼きはらわれたものである。鎌倉時代末期、室町時代末期と二回の火災ののち近世のはじめであろうか再々興された堂宇は現在の法海寺であり、法海寺にあつては第三の時代に編年されるものである。

八幡町史編纂の事業をすすめてすでに数年になるが、古代、中世、近世を遡って調査をつめばつむ程に八幡の歴史をつらぬくものは法海寺であることを知らされたのである。今後、法海寺について本格的に取り組みたいと思うのであるが、調査の過程で知ることをえた資料を以上の三期とその前史の四つの時代にわけて考えてみよう。

一 八幡の谷における法海寺前史

法海寺をのべるにあたり、その飛鳥・白鳳時代開創説については一おう否定の立場をとつてきたのであるが、このことは天智天皇初願という寺伝をまつたくうけつけないというのではなく、現在の段階において把握することをえた実証的資料の範囲では、平安時代初期をさかのほりうる証拠はみあたらないといつてはすぎない。それどころか考察の視野を寺の周辺地域

にひろげた場合に、八幡から横須賀につづく沖積低地の水田としての利用は、弥生文化前期、中期という知多半島の農耕文化発祥の時代からはじまつており、野崎、獅子懸、柳ヶ坪などの代表的な弥生集落（町史資料集『八幡のむらのおいたち』参照）の存在がそれを物語っており、これらの遺跡のある砂堆列の上にはなお古墳時代から飛鳥、白鳳、奈良時代とつづく、より新しい遺跡群が濃厚に分布して、それらの時代における歴代集落の繁栄を裏付けているのである。

砂堆の上に展開する遺跡群とともに見のがすことのできないのは、遺跡をめぐる水田地帯の地割の問題である。ここにはその地割を詳述する余裕をもたないので、その紹介を述べるにとどめたいのであるが、大化改新にはじまる班田収授の口分田を示すいわゆる条理制の地割に類似する遺構が、方向を同じくした長く三つの系列にわけて指摘できるのである。そして三つの系列はそれぞれ谷の奥までつづいており、いずれも三十六坪前後の坪数、換言すれば大体一単位のひろがりをもっていることがわかる（図版二の上）。

大きな平野部におけるいわゆる条理制の指標となるような地域とことなり、六町四方の整然とした空間をもちあわしていない半島の侵蝕谷低地では、遺構の中で乱れている点を復原して考えてみても、同様な地割が成立することは不可能であり、不規則な地形に制約された結果、こうした独立した形態で展開さ

せられたものであろう。しかし一の坪、大坪などと称している地名も存しており、各坪の中にも現在相当崩れているとわいえ大部分が長地型の地割を一部には半折型を具備しているのが、飛鳥、白鳳、奈良時代のころの条理制の地割と想定するのであるが、精密調査の過程にある現段階では、条理制類似の遺構と指摘するにとどめたい。知多半島における各侵蝕谷の中でこうした水田地割をもっている谷は、この八幡、横須賀の谷のほかには阿久比谷の一部である宮津の地域をはじめ、美浜町野間の谷や北部では大高の一部などわずかな例しかあげることができない。それらは天智天皇の時代とはいえないまでも、その後条理制の地割が地方に浸透してきた際の、大規模な土木工事実施による先進的な農業地帯を裏証するものである。

和名抄にみられる尾張国知多郡の五郷（番賀・にえ代・富具・但馬・英比）の中に八幡・横須賀の谷の郷名をみとめられたいのは、他地域にも例の多い郡名と郷名とが同じのために記述が略されたものとも考えられて、兎もかく知多郷の存在が問題として提起される埋田でもある。こうしたことはまたこの地域にのこる知多臣一族の繁栄した土地であり、古代における知多郡の郡領の地であつたという伝説にもつながっており、樂王山法海寺の創建がさらに時代をのほりうる可能性も充分うなづかれる条件である。しかしこれらの問題の詳説は他日を期することを急したい。

二 平安時代初期建立の法海寺

境内にのこる塔心礎石や採集された古瓦など、実証資料によつて確實に推定される法海寺の開創は平安時代初期と考えられる。そして瓦だめの中から、焼けた古瓦など平安時代の遺物とともに、鎌倉時代後期の陶質土器が併出し、平安時代初期の法海寺は鎌倉時代後期に焼失したことを物語っている。この時期における資料としてあげられるものはわずかであり、次の三例に代表される。

1、古瓦（図版一の1）浜岡佐一郎氏が採集した変種蓮花文の軒丸瓦一個と最近瓦だめより出土した一群の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦である。後者の瓦は唐草文の軒平瓦も、素瓣の蓮花文軒丸瓦も文様の中止部を欠損していて、資料として惜しまれるのであるが、前者と土質の差がみとめられないなどやはり一様に平安時代初期のものと考えたい。

2、塔心礎石（図版一の2）心柱をはめた穴の径は一尺五寸であるが、その外周にそつてさらに輪環溝をもっていることは田中重久氏の報告の通りである。実査をねがった石田茂作博士は塔の高さを約六十尺と想定され、平安時代初期のもので前述した古瓦と同時期のものと教えられた。石の面は火熱をうけてはがれておる。また今は移動されて一隅に保存されているが、礎石の原位置は現在の本堂附近と伝えられている。

3、毘沙門天像 古代の仏像がほとんど鳥有に帰した中で、毘

沙門天像の一翼のみが残っている。立像五尺五寸五分で頸部に火難をうけている。藤原時代末期の作であろう。

創建時代の法海寺における伽藍配置については、奈良時代の平地伽藍の伝統が平安時代初期にまでうけつがれている例として現在その調査をつづけている。（杉崎 章）

三 室町時代の額石保法海寺

「卷六百 応永三丙子十二月十五日

於尾州智多郡額石保法海寺埋性坊

書写畢 充筆金剛資定殿」（図版一の3）

これは知多郡知多町佐布里のおなじく天臺宗の古刹、如意寺に伝わる大盤右経六百卷の奥書の一つである。鎌倉時代後期に焼失した法海寺がすでに再興されていたもので、埋性坊とは法海寺内坊の一つであり、この地域の中世の地名が額石保とよばれていたことが知られる。

そしてこの時代になると、その後火災をうけているとはいへ、かつての繁栄を物語る仏具・仏画などの資料も多い。それらの中で目ぼしいものを紹介してみよう。

1 灌頂法具（図版一の4）密教独自の法具であり、輪玉^{リンゴウ}・羯磨^{カクマ}・四攝^{シダツ}・金棒^{キンボウ}とそろつており、なおまた金剛鈴^{コンゴウシユ}五個のうち独鈷鈴と宝珠鈴が保存されている。いずれも室町時代のものである。

2 俱利香合 乾漆製で中国渡来のものである。

3 仏画 仏画についてはその数が多い。しかしその中でも次の例はすぐれている

両界曼荼羅二幅と涅槃像一幅・十六善神図一幅はともに室町時代の作品であり、妙見察知図一幅は桃山時代のものである。

室町時代の法海寺は、織田・今川の決戦であつた桶狭間戦（永禄三年の前年、その前ぶれとして両勢力が知多半島でせり合つた中で、織田信長のために焼かれたと伝えられている。寺の東方の独立した丘の上に寺本城をきき今川勢に加担していた花井播磨守信忠が、織田勢に攻められていた味方の村木砦（東浦町）の助勢にでかけて、一族とともに石ヶ瀬川（大府町）に布陣していたおり、その背後をおそつた織田勢のために、寺本城・木田城とともに法海寺も火を放たれたものといわれている。

（堀田録吾）

四 願主大橋氏再々興の法海寺

戦国時代末期の波らんの中で焼失していつた室町時代の法海寺が、近世の始めにあたり、土地の豪族大橋氏によつて再々興されたものが現在の法海寺である。

近世の法海寺を考えるにあたり、大橋氏について略述してみたい。

もともと大橋氏の祖先は淡路国や伊勢国に居住して足尊氏以来室町幕府に出仕しておつたのであるが、俊兼（清光院殿玉霜全宝大居士？、慶長十六・七・六卒）の代にいたり將軍家断絶にあい四男・五男とともに尾張国へ移住してきたといわれている。

る。そして現在の法海寺を一寄進にて建立したと伝えられる源応律師（寛永十一・七・十一卒）は大橋氏の尾張における二代目である。三代目の吉郷（慈山正雲 主・寛文十一・十一・二二卒）以降は代々又右衛門と称し、近くの大祥院に石塔もほとんど完存しており、その家系を推察するのに頼りになるのであるが、元禄・宝永のころ宗家の又右衛門家はもちろん分家の助九郎家や六兵衛家など一族あげて伊勢国長島に新田をきき、長島新田東対海地に大祥院末の常在院をたてて移住していつたものである。そしてその後も長島と当地との間の関係は長くつづき、一族は大祥院の任職となるもの、寺本の中島村にかえり医師になるもの、その往来はげしかつたものである。

そして法海寺建立願主と伝えられる源応律師にしても寛永十一年七月十一日卒去というはか知る所わずかであるが、天保元年の十月二十二日に源応律師・正慶大師の二百回忌の供養をいたしておる。正慶大師については寺宝の両界曼荼羅の表装装幀の中に、施主加賀内万正慶大師参詣徒也として慶長十五年十一月十九日とあるが、忠家が許されるならば慶長の末年のころ、すでに現在の法海寺が完成していたのではなからうかと考えられる。しかしまた本堂において最も古く由緒を誇る 沙門大猷を修睦したおりの台座装幀に「明和二乙九月吉日再々興願主大橋六兵衛伊州長島新田」と記されている資料もある。明和二年といえは源応律師他界してから百三十年、願主と記されている大橋六兵衛は源応律師からかぞえて六代目の後えいであるが、

現在の法海寺などの部分を再々興したのであるうか、研究の課題は近世になつてからも多く残されている。

薬王山法海寺については、なおききのことしたいことがはなはだ多い。それぞれの堂宇・寺坊・仏像・仏具に、現在の知多町

八幡の地域が近世のころ寺平村四ヶ村として法海寺を中心にひろげてきた村の歴史がのこされているのであり、その伝記も長く保存されてきたものであるか、それらのことすべて調査して他日にゆすりた。

(加古文雄)

尾張国知田郡大高町発見の古瓦について

芳賀 陽

かつて野帖一号に長床式乙類の土器の発見を紹介した西大高畑遺跡を本年三月に探訪した際、遺跡の上に建築工事が進められており各種の遺物が掘り出されて散乱していた。その中に年代を推定できない瓦の破片があつたので簡単に紹介することにした。

遺跡は東海道本線の走っている谷(かつてのあゆち溝から大府にまで伸びている谷で谷口に発達した砂堆の上に大高の町が営まれている)の南、大高小学校のある丘陵(鮮新世・洪積世の堆積層からなる)の一端が北に舌状にはりだした台地の上で、猫塚とよばれる小さなマウンドを中心とした一帯である。

採集した瓦片は灰黒色または緑色をおび、必ずしも焼成のよいもののばかりとはいえないようである。しかも紅褐色を呈しているものが多く火災にあつたことを物語っており、瓦の規格を明らかにできるものもない。

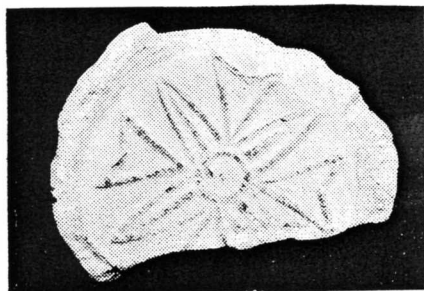
平瓦 裏面(凸面)に荒く太く条痕を、表面(凹面)にはこまかな布目が附けられている物が普通のようなものである。裏面上端

に六・七横の巾で矩形や菱形の庄痕を施し、左右の角を削り出す手法も見られる。

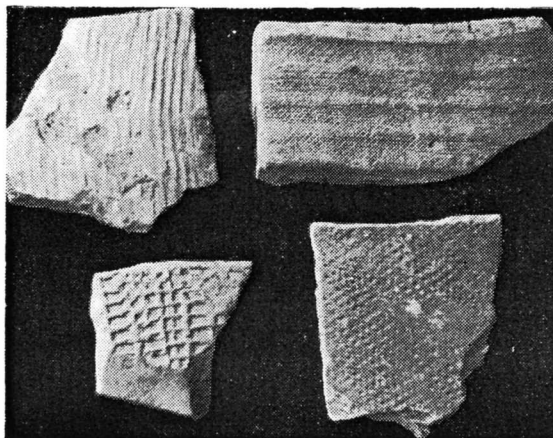
丸瓦 表面(凸面)は滑らかに仕上げられているが上端に菱形の庄痕が斑文状につけられ、裏面(凹面)には平瓦と同様な布目があり、左右の辺の角を削り出す手法も見られる。丸・平瓦ともに布目が凹面にしるされているのは製作技術に関係があるのではないかと考えられる。

軒平瓦(字瓦) 平行な四条の沈線によつてかまぼこ形に作りだされた重弧文が瓦当面に施されている。瓦の巾・長さともに不明であるが瓦当面から六・七横の深さで裏面が肥厚して顎状を呈し矩形または菱形の庄痕が施され、瓦当面および顎の後には直角になつていることが知られる。瓦の両側も直角に終つてゐる。瓦当面の上下の角を削り出す手法も見られる。(断面図及び図版二の下参照)

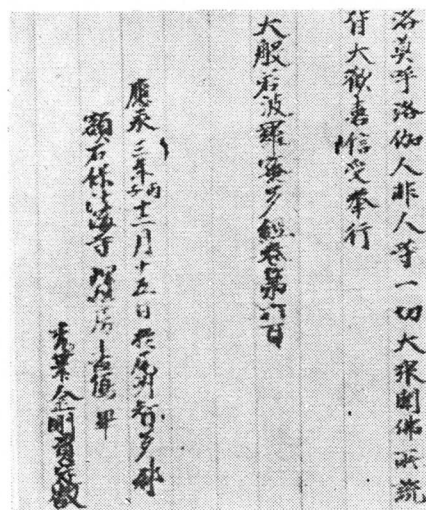
重弧文をもつ軒平瓦は白鳳から奈良時代にかけて用いられたことが知られており、知多郡では奥田廃寺(註一)から発見さ



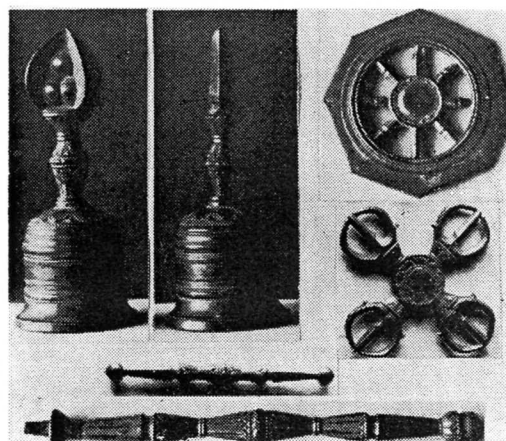
1. 法海寺出土の古瓦
軒丸瓦・軒平瓦・平瓦



2. 法海寺の塔心礎石
輪環溝をもつた心礎



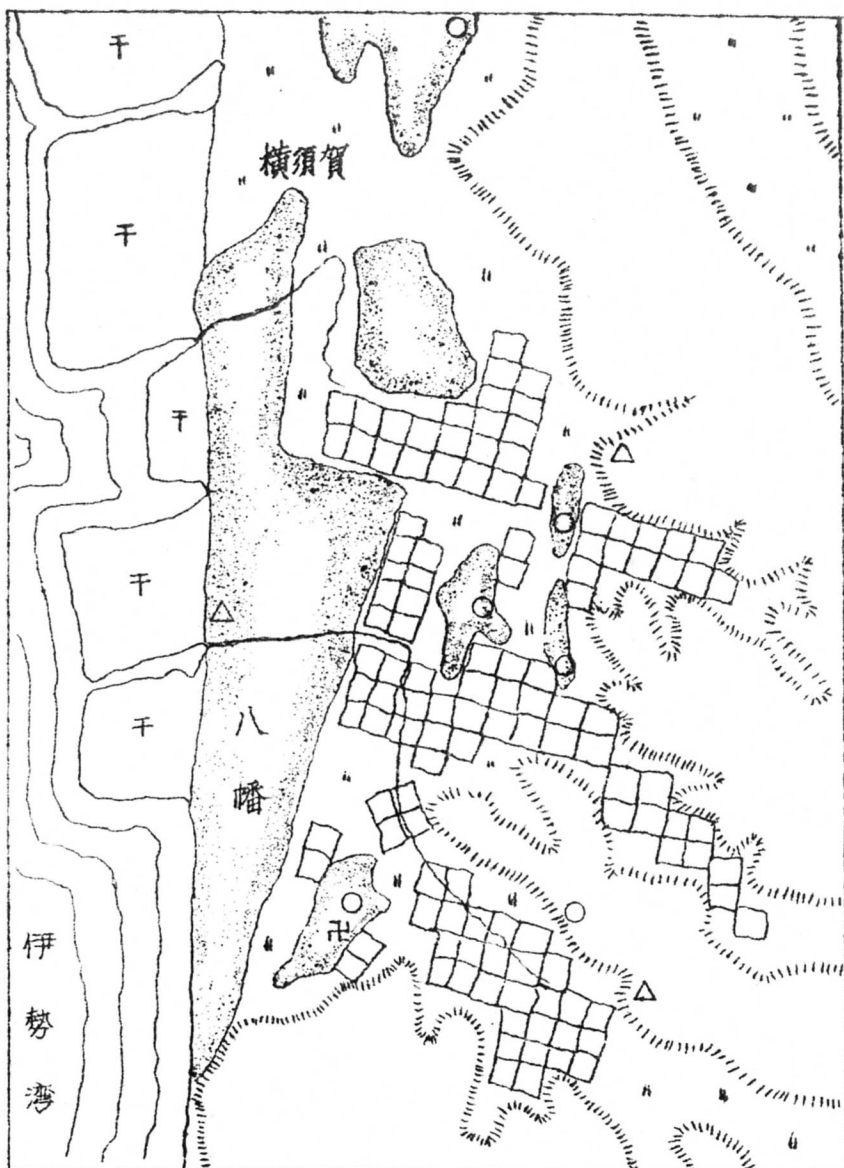
3. 大盤若經奥書（如意寺蔵）
応永三年額石保法海寺



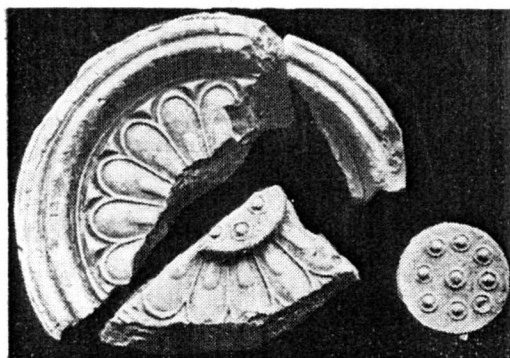
4. 法海寺所蔵の灌頂法具
宝珠鈴と独鈷鈴
輪宝・羯磨棒
金四
檄

凡 例

- 弥生遺跡
- △ 古 墳
- 卍 法 海 寺
- ⊙ 丘 陵
- || 水 田
- ⊠ 条理制類
似の遺構
のある水田
- 干 干 拓 地
- 砂 堆



法海寺周辺の古代遺跡(愛知県知多郡知多町)



愛知県知多郡大高町西大高畑発見の古瓦

蓮華文軒丸瓦
重弧文軒平瓦

